



休刊大日第一第三日
のありバスコダガマに至
らはじめて亞弗利加の南
端を廻航して印度に至る

海路始めて開かれた(紀

元一、四九七)△始めて

米國より組立家屋等と

(大正一二)△今英炭礦能

業失敗復業を始む泥炭業

數七ヶ月(大正一五)

で鎌田紳士無事

鎌菜税滞納。減

表面銛刀でも船

花を散らす頃。ドイツのあ

落してゆく。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

ころでは大體該國情を容るべく来る町會に提案附款されものと想像される而して町會に於て之れを認むる時は町の行政區は從來より更に一區を増し同時に一名の新區長が選任されるわけであるが右實現の曉は癸未六十五六年の北目と約百六十戸の胡麻澤と名連源の区域を異にし乍ら一區となつてゐた爲め往々急速の徹底を欠いた町の通達事項の如きも今後は斷然その敏達を期する事となり出来るのをはじめとし其他の全般に亘り有形無形の便益が多數に生ずる一方消極方面的の影響をし

時	
龜井初九先生選句	
山茶花にまどもの怨や手 術臺	身につかぬ宿の寢巻や 夜時雨
交番の硝子戸暗き時雨か な	時雨るるや裾野へ延び 山の壁
山茶花訪病る人もなかり けり	青竹を運ぶ一駄に時雨 り
山茶花ひこまゝ持てる 蒼かな	山茶花の花あかりす 哉
片山のあかるきまことに時 雨けり	山茶花に音なく雨の草 にけり
朝夕に掃く山茶花となり にけり	やありて時雨の舟一 りにけり
傘さして時雨の渡舟など かしく	日は西に淡くも見えて 雨れけり
蒼天	山茶花にこぼるる雀蟬 近く

んでしまひ本年徵兵検査でて出撃したが一級は前記
甲種合格となり遠く小學校源一の珍らしい友情に賞讃
當時の開拓生である同じ町の聲を放つてゐる

病弱の前途を悲觀し

首を縊つて自殺

娘の隙を見澄まし

病院の深にさがる

内郷村五十嵐炭礦坑夫阿部
慈觀の結果

吉四郎は胃腸病で去月半入院加療中の者であったが
朝午前八時頃附添の同士

二女スレ(二六)の隙を見澄まし梁へ手拭をかけ縊死を遂
びたが原因は病弱の前途を立會開廷

七日來平町南町松木病院へ
助川秋次(二七)假名に係る尊
屬殺し事件の公判は今二十
日午後一時から平支部に於
中島裁判長係り武田檢事
鶴與、漆畠、直木爾辨護士

△婚姻

夏井村荒田目田中山
七箇(二八)平町新川町
村上カツ(二九)

北目胡摩澤の分離 近く決定されん

俄に解決を促進した

兩者連署の陳情

事迷惑並に矢田川改修工事
補助を近く縣當局に申請す
る筈であるが村では工費三
萬圓の豫算で來年度に施行
を望んで居るに對し縣當局
では財政困難なる處から五
千圓程度に止め度い意向ら
しいが本年一ヶ年の被害す
害を根絶する緊急の工事を
ので縣財政の難局如何では
村債を起し該工事を完成し
縣の交附金を以て償還せん
とする見込であるから前記
縣當局の腹案を改め規定し
基シキ補助増額を希望してゐ
ると

郡山へ 高橋市郎 同
警官小異動 本縣 警務課へ 本 因 近
平へ 二本松同 平同
二本松へ 武 山 場
平へ 柳 田 嘉

卓球試合

第三小學校 平第三小學校ではこの程
郡大會を催す
卓球協會から卓球コートを
寄贈を受けたのでその披
露試合とし午前十時から同校開催する

人情よりも薄いと云はれ、内の餘魚に政治本源一郎三
た當守之れはまだ珍らしい。三は親戚存するのない安治
命持はなし。今二十日守の爲に同窓生五十八名間を
創八時四十五分平驛から青弁走し同脩金を集め、且つ盛
年閣員、區長始め町内有志、大な送別會を主催してやつ
同窓生一同の驛頭を減かす。たばかりが以前には住所不
萬歳の聲に送られ滿洲鐵道定にも均しい安治の爲めに
獨立守備兵として出發した前記六丁目に一軒寮を借り
平町六丁目八五山崎安治君しそこに居住させた親身も
(三)は三年前兩親に死別し及ばぬ友情ぶりに區長佐藤
實妹故子(二)は現在同町南安治、青年少團長鎌木榮治
開精理店佐藤屋事佐藤せいは回草を町内にまはし突然
方の酌婦に弟保(五)は東京へ警期に當つて侵入した安
本所區石原町四丁目金澤蒲石に對して些も不服がまし
商店に徒弟など云ふ具合にき處なく町役場に右の旨を
一家離散の状態にある外同交渉藤田軍事主任の義侠心
人亦勞働に從事して全日に足袋の縫する
至つたが安治は性愛の大酒枕べに
飲みで妹の身代金も悉く飲る。西吹いて
の見送人青年少團旗に送ら
稻こき器械の

大谷時計病院	三十五錢
百四十瓦特	三十一十五錢
四十瓦特	三十一十五錢
一個（モ）御電話ガアレバ早速御届ケイタシマス	三十
是非御用命ヲ願マス	十
ワット	百

成ヶ賛城郷友會第五十回総集會は来る二十三日午前十時より福島市北裡演舞場に於て開催されるが寺澤會長、大原副會長、近藤教育委成、豊間村回春院所長、端田地方裁判所監督、書記、濱島商務教授、太森モーター副會常務をはじめ学生會員を加へ二百餘名の急施を要する。少い縣の豫算に就て、村長が近く申請

金も事野らて	殴られたこと
小川の山田駒治	小川村下小川上平農山田駒治
財産上の争ひから兎角不和で	(五三)は實弟根本金治と財
あるがこの程前後數回に涉	治(三)は實弟根本金治と財
つて殴打されたと證據の根	産上の争ひから兎角不和で
桿を持参し二十二平磐へ告	あるがこの程前後數回に涉
訴したと	つて殴打されたと證據の根
失業者防止策	桿を持参し二十二平磐へ告
毎月村小田炭鉱秋原鍛冶所	訴したと
ことは十二月から役員二十三	失業者防止策
名の給料一割減を廻行する	毎月村小田炭鉱秋原鍛冶所
酒中口論の末喧嘩となり兩	飲食店で喧嘩
町田飲食店水山ヤン万で飲	村岡田川炭礦々業代理人武
藤忠雄及び佐藤一男の兩人	藤忠雄及び佐藤一男の兩人
は十九日午後八時頃岡村東	は十九日午後八時頃岡村東
町田飲食店水山ヤン万で飲	町田飲食店水山ヤン万で飲
酒中口論の末喧嘩となり兩	酒中口論の末喧嘩となり兩
共輕傷を負つたと	共輕傷を負つたと

印刷は通信上に不利を招くことがありはしないか、私めなかつた。
窮屈して家財道具や衣類等を入質し盡して終つた有様であるが鮮魚商が資本の少い割に利益が多いと云ふので前記の失業群は云ひ合刀魚の様に苦くなつてゐる様子がつくりの魚屋となつた爲今度は看屋さんと連絡して販賣の機会をうなづかせた様に俄かづゝの魚屋とは悲惨の極みである。

明 日 舊 月 新 月
吉 因 暦 一 曆
泰 春 日

辛 一 白 の 人 心 痘 を 横 に 伸 ば し て 二 黒 の 人 割 り 合 は ま る
の 多 き 日 物 始 め は 勿 論 と も 破 る べし ▲ 四 緑 の も 注 意 ▲ 三 碧 の 人 製 作 す と き は 成 る べ し

親身も及ばぬ世話ををしてやる
入營の行を盛にしてやる

涙ぐましい同情

飲み抜けの男

一切を水に流逝して
鎌田昌民仲直り
遠藤町助役機宜の調停案

納炭を持て餘す
鐵道でない好間村の炭礦では先年よりの炭礦不振で大正十五年から本年まで礦業税約一萬

場合を多くするが、これは方法につき御考慮を煩はし
どうゆう事情からこんな大たく希望する
さくしなければならぬのか
わからぬが ◇ 消印に苦情 (○〇生)

社会生活の複雑化につれ 私はこの間鉛筆で書いた
多くの文句に苦情をもぎ取
△ 受取人が迷惑して もかま
ないといふ意味で、あくま
印ををするか、ハガキは
印のすみよりも深いすみ
書くべし、鉛筆ではかん
た見出しがある

外科光南專線門科